

### 1. 研究課題・代表者名

研究課題	Physiological Birth への影響に関する学際的研究 : Fetal microchimerism とつわりとの関連性を探索するためのデルファイ調査 (フェーズ1)
研究代表者	新福洋子

### 2. 研究実績の概要

生物学者の入江氏と会合を持ち、入江氏がマイクロキメリズム研究については収束させていく方向性だということをお伝えされたため、今後の本研究課題の方向性について議論した。その結果、課題となっていた胎児が男児でないと検査できないという点においては、検査方法を変更することで可能であるということがわかり、検査を行っている会社と相談の上、数件データを取ってみる段階に進むことを提案された。紹介された HLA 研究所 (<https://hla.or.jp/>) は、キメリズムに関する遺伝子検査も実施しており、サンプルを取得できた場合、検査自体は委託することができる。

本研究について、秋から新福の研究室に国費留学するエチオピア人医師 (専門病理学) が興味を示しており、彼女と共に令和5年度に一度データ収集を進めるかどうか、データ収集先との調整をはかる必要がある。

### 3. 今後の研究の推進方策

令和5年度に一度データ収集を進めるかどうか、広島大学病院長と相談の上、許可を取ること、その上で研究倫理審査を進めることが必要である。

### 1. 研究課題・代表者名

研究課題	科学・技術が関与する課題解決の活動サイクルが進展するための組織構築の在り方を探る：認知症を対象として
研究代表者	狩野光伸

### 2. 研究実績の概要

認知症を「現場」としながら、「観察解析」している人材と、「構成的活動を行っている」人材が、同時に出席する場を設定し、互いの知見と意見の柔軟な交換を通じて、科学・技術が関与する課題解決の活動サイクルが進展するための組織構築の在り方を探ることが、本研究の目的である。

認知症当事者も登壇される、2022年の日経認知症シンポジウムの機会も含め議論を継続してきた。

「現場」から「聴く」と現象論が得られる。中に科学者の感情の動く対象があると問いから帰納的研究活動は始まるものと期待される。他方では、理論的裏付けも必要で、演繹的な研究活動と行き来が起こる必要があると考えられる。

この議論の成果もベースに、『SDGsの時代に探究・研究を進めるガイドブック』を培風館より2022年度に出版した。また、京都大学URA・JASTIPとASEANでの活動を通じて、社会課題解決に必要とされる多様な分野を糾合するために必要と考えられる「科学技術コーディネータ」のあり方を議論してきた。

### 3. 今後の研究の推進方策

こうした現場・観察解析・構成的活動をサイクルとする「学術エコシステム」はどう広げうるか？について、特に、短期的成果を求め演繹が基本の建付けの下で、より具体的方法論を探る必要が考えられ、今後も彫琢が必要だと考えられた。方向性としては、一国会議員との意見交換も通じて、セクターを超えた共感が得られる可能性を見出だしている。

このため、2023年度9月3～5日に、独自主催による初の対面会議「共感と学問」を、20名程度の科学者を中心として開催し、現場・観察解析・構成的活動をサイクルとして進めていける方法論をより確実にするための議論を行う。なお、この際に、具体的な議論の題材を、認知症・高齢化社会にとどまらず、地方活性化や災害対応などにも広げ、方法の一般化を図りたい。